

長男のコロナ感染で結局私は参列できませんでしたが、多くの方とお便りや電話でお話しさせていただきました。ありがとうございます。

王子は私が二十代から三十代にかけて通勤していた所なので、とても懐かしく、無認可保育園がどうなっているか見てみたい、とも思っていたのですが、それも叶いませんでした。思い出すままに方々お便りさせていただきました。

平川のキャンパスで国語学や国文学講読の授業を受けさせていただきました。

仕事を辞めて家庭にはいつてしまった私でしたが、拙文、拙歌等をお送りしてはご覧いただきました。

平川のキャンパスにバイクで通われる先生のお姿は印象に残っています。

一の坂川の源氏螢を見る会では、螢が先生の御手にとまり光っていました。

コンパの時の「でんでん虫」の歌もご表情豊かに皆を笑わせてくださいました。

山口大学を去られてからも梅光学院大学へ行かれ、私達が還暦の時の同窓会においでいただきました。

ずっと私の疑問に答え続けてくださり、ご論文も拝読させていただきました。

東京へ移られてからも「源氏」の講読をされていると伺い、旧佐藤恭子さんと、上京したらその仲間になって受講してみたい、と思っていました。「鈴虫」の巻まで行かれたというお葉書をいただ

き、「仏」の道へとはいられたことを知りました。

今頃はご長男 関 周さんの「草原」がホールに流れ皆様が歌っておられることでしょう。愚息が治ったら拝聴させていただきます。明後日8月2日より出社できるそうです。

長い間私共を導いてくださり、本当にありがとうございます。

(2023年7月31日)

(かしはら・ようこ)

## 関先生の思い出

二階堂 整

(人文1983年度卒)

関先生は肅々と授業を進められる方であった。授業中もあまり表情を変えすることもなく、多弁でもなかった。そんな先生が授業中、笑った話を書いてみたい。

といっても40年以上も前の話であり、記憶も不確かなところがある。なにより今と比べれば、戸惑うような点もあろうかと思うが、お許し願いたい。

僕が在学中、国語学は関先生と添田先生が担当なさっていた。

関先生は概論で渡辺実の「国語構文論」を、特殊講義で時枝誠記の文法の講義をなさっていたと思う。今、思えば、ゼいたくなく学びを与えてくださったのだと思うが、学生の頃はそれに気づきもでき

ず、教科書だけが残ったありさまである。

演習は源氏物語の購読であった。ちなみに添田先生は演習で万葉集をとりあげておられた。源氏と万葉という2つの作品を学ぶことができたことも、ありがたい機会であった。お二人が、学問の基本を学ぶ機会を与えてくださったと思う。

さて、関先生の演習は源氏物語の影印本（テキストもあつた気がする）を使って、学生が指定範囲を発表するものであつた。僕らの時は、すでに宇治十帖に入っていたと思う。といつても、おそらく1周目の途中ではなく、2周目、3周目、もしかしたらもつともと僕らは話し合っていたが、怖くて聞けなかつた。聞いたところで、そんなつまらないことを聞くのかといった顔をされそうで、その勇氣？はなかつた。

演習の担当になつた学生は、発表資料を当日までに準備しなくてはならない。そのころ、資料の印刷は、いわゆる謄写版であつた。僕らの時代は原紙がホワイトミリアで、それに鉄筆で書いていた。鉄筆は、国語学であろうと国文学であろうと演習の必需品であつた。ロウ紙でない分、まだよかつたが、発表前は、インクをつけたローラーで、一枚一枚、印刷せねばならず（要するに版画印刷と同じ）、手は汚れるは、うまく字が写らないはで、大騒動であつた。

ただ、関先生の源氏物語の演習に関しては青焼きコピーが認められていた。資料は原稿に書くだけで、あとは機械（青焼き機）で印刷できるので、負担は段違いであつた。青焼きが許されたのは関先生の演習のみだったので、何か先生のお考えがあつたことと思う。これも聞いてみたいことの一つであつたが、今はもう手遅れである。もう少しいろいろとお話をうかがえばよかつたと思う。

さて、演習では、発表者が影印本の指定範囲を翻刻し、その中で注釈や気になる問題点を取り上げ、参考文献をまとめながら、発表する。冒頭、発表者以外の出席学生は翻刻された箇所を現代語訳し、それを読み上げていた。当時、今泉忠義訳『源氏物語』（講談社学術文庫）が細かく分冊されており、不真面目な僕らは、これなら安く買える、喜んで文芸堂で購入した。はては、授業に臨んでも、ろくろく授業資料も見ずに、文庫本の現代語訳をそのまま読み上げていた。

そんなある日の発表で、たまたまAさんが、授業の範囲の箇所の現代語訳を読み上げたところ、「はい、それは原文にないんです」といつて関先生はニヤツと笑われた。いつも先生の授業に出席した者にしかわからない程の表情の変化で、一瞬であつたが、確かに笑われたと思う。

これは、影印本と講談社学術文庫の2つの底本の違いによるものであつた。学術文庫の底本では、影印本にない文があり、僕らは、そんなことも気にせず、今泉源氏の現代語訳にたよりきつていたための過ちであつた。たまたまAさんがその箇所にあたつてしまつただけで、皆がしてかしてしまつたことでもあつた。今思えば、国語学国文学を専攻する学生として、基本がなっていないというおぼつかしい出来事である。

多分、関先生は、該当の箇所で、「今年の学生は、しでかすか」とかまえており、やらかしたとたんに、ニヤツと笑われたことと思う。源氏物語を延々と講読し続けてきた演習であれば、何か所か同じような問題はあると思われる。そのたびに、先生は、「今回は、今年は」と学生の現代語訳の発表を楽しみになさっていたのでは

ないかと想像する。やらかすたびに、ニヤツとお笑いになって、すぐまたいつもの表情にもどり、粛々と授業を進められたことと思う。自分の不勉強を棚に上げての言葉になるが、あまり表情を変えられない関先生が一瞬ではあるが笑ったことが、今でも忘れられない思い出である。

たぶん、こんな駄文を書いている僕のことを見て、空の上から、そんなことしか書けないのかと、またニヤツとお笑いになっていることと思う。

ふがいない卒業生ではあるが、お許しくださいませと思う。

先生のご冥福をお祈りする。

(にかいどう・ひとし)

## 関先生の思い出

田中(石井)敦子

関一雄先生がお亡くなりになったのを知ったのは、今年度の学会報告が送られて来た時でした。検索してみると、いくつかの新聞サイトに「老衰」とあり、ああ、先生はこちらからあちらへ、そんなりと渡っていかれたのだなあと思いました。きっと最後の時まで次の研究のことをお考えになっていたことでしょう。それからしばらく大学時代のことが次々に思い出されてきたところ、ちょうど開設された研究室のLINEからお声をかけていただき、この文を書くことになりました。

研究室に入ったのは昭和五十八年でした。この年は国文学研究室が大人気で、国語学は希望者が少なかったたので、私は無試験で研究室に入ることができました。当時の教官は関先生と添田建治郎先生でしたが、学生間では、競争を勝ち抜いた国文学に比べ、国語学メンバーの不勉強を嘆かれているとの噂もありました。事の真偽はさっておき、私は謙遜なしに不真面目な学生でした。

高校時代に古典文法などが好きだったので国語学を選んだものの、ゼミの前にちょこちょこ調べてみる程度で、ほとんどろくな発表はできませんでした。最初のゼミ発表では基本的な語の定義すらいい加減で、先生があきれたような口ぶりで指摘されたことを覚えていきます。あれは研究室に入りたてだったので叱られなかったのでしょうか。

お二人の先生方には、「調べること」のキホンを厳しく教えていただきました。私たち学生が一番恐れていたのは、発表をやっとこさ終えた後の「それは問題点ではありません」というお言葉でした。(これはこれで「やっぱりな」という感じで、いつぞ清々しかったものです)。またいつ頃だったか、関先生のゼミで、発表者が「用例は『日本国語大辞典』に載っていました」と言った時に非常にお怒りになり、原本に当たることの大切さを懇々と説かれたことがありました。資料の中から自分で問題点を探すこと、調べるときに又引きをせずに元資料に当たること。現実には何とかして発表を乗り切ることしか考えていませんでしたが、当時いつも一緒にいた友人Eと、「私たちは勉強はできなかったけれど、勉強の仕方を教えてもらった」と話したものでした。友人Eといえは、この文を書くに当たって、何か思い出はある?と聞いたところ、「少女Aし